



日本記者クラブ
シリーズ企画「戦後 70 年 語る・問う」②

昭和史から何を学ぶか

保阪正康 作家

2014年10月7日

シリーズ企画「戦後 70 年」の 2 回目は、昭和史研究の第一人者である保阪正康氏に宮内庁が公開したばかりの「昭和天皇実録」を読み解く中で、戦後 70 年を経て、継承していくべき視点とメディアの課題についても踏み込んで語っていただいた。保阪氏は「昭和天皇実録」には天皇の「悲しさ」と「悔しさ」がにじんでおり、開戦を望んでいなかった天皇が軍事指導者たちに追いつめられていった経過が記されている。貴重な史料となっていると指摘。長らく外交課題となっている「従軍慰安婦」問題については「軍隊と性」は古代ローマ時代からいかなる軍隊も性病に悩まされてきた。性病の管理に直接向き合ってきた軍医の話を紹介しながら「従軍慰安婦の中にも兵隊相手から司令官専門の相手まで階層が存在していた事実を具体的に披露。そして昭和史を次世代に語り継いでゆくために、今後は歴史教育の国際交流が重要になる、と熱く語った。（川村）

司会：川村晃司 日本記者クラブ企画委員（テレビ朝日報道局報道企画部コメンテーター）

日本記者クラブ Youtube チャンネル

https://www.youtube.com/watch?v=CLePIU6xk0g&list=UU_iMvY293APrYBx0CJReIVw

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会：川村晃司・企画委員（テレビ朝日報道局報道企画部コメンテーター） 「戦後70年 語る 問う」第2回目のゲストに作家の保阪正康さんをお招きしました。テーマは「いま、昭和史から何を学ぶか」です。先ごろ出されました『昭和天皇実録』についても、保阪さんはいろいろなところで書かれたり、お話しています。日本記者クラブでもぜひ、いまのメディアとの状況も含めて、お話を伺いたいと思います。

最近、保阪さんは半藤一利さんとの対談を中心に、『そして、メディアは日本を戦争に導いた』、もう一つは『日中韓を振り回すナショナリズムの正体』というような本を出しております。「サンデー毎日」では、『昭和天皇実録』の裏を読むといいますが、表と裏という形で、シリーズで、現在、第2回目発売中です。このシリーズを先取りした部分も含めて、きょう、伺いたいと思います。

保阪さんが当記者クラブに来られるのは、きょうが3回目です。記者研修と、歴史に関するシリーズで来られています。アジアについてのお話をいただいております。

保阪正康・作家 きょうで3回になるのですけれども、ほかで話すところとは違って、ちょっと緊張しています。

きょうの話は昭和史から何を学ぶかということです。その前に、戦後70年をどう考えるかということ、私なりに感じていることを初めに整理してお伝えしておきたいと思います。

戦後70年とは、太平洋戦争が終わって70年です。2つの意味があると思います。

1つは、同時代史から歴史へ移行していく。同時代史から歴史へ移行していくというのは、戦争体験者、特に戦場体験者がほとんど数が少なくなることによって、戦争を語る、その内容が同時代史の感性、皮膚感覚から、歴史の中へと移っていく。ちょうど70年というのは、そういう期間かなと思います。

2つ目ですが、では同時代史を生きてきた

私たちは、太平洋戦争の中から何を教訓として次の世代へ伝えていくのだろうか。役割ですね。この役割をどういうふうに自覚するかということだと思います。歴史の中に太平洋戦争が移行していくのに比例すると同時に、私たちは太平洋戦争から何を学んでいるかということ、それを次の世代に伝えていく役割があると思います。

戦争の教訓を継承する視点

私個人のことで言えば、太平洋戦争が教えていることは3点に絞られると思います。それは、政治、思想に全く関係がなく、誰が見てもこの3つだけは共通の理解としてつないでいかなければいけないと思います。

1つ目です。政治と軍事の関係です。軍事が政治を従属化してコントロールしました。政治が軍事をコントロールするのは、20世紀のシビリアンコントロール。どの国もそうでした。民主主義体制のアメリカ、イギリスは言うまでもなく、ヒトラーやスターリンでさえも、文官ですから、軍事をコントロールしました。つまり、政治が軍事をコントロールしました。

反して、私たちの国は軍事が政治をコントロールしました。軍事が政治をコントロールするという、これは統帥権という言葉で語られます。この異様さ。つまり、日本の太平洋戦争は、軍事が政治をコントロールして抑圧した中で行われた。とすれば、当然ながら日本の軍人はどういう教育を受けて、どういう物の考え方を、どのような歴史観を持っていたのか、というのが検証されなければいけません。そこに至って、やっとな政治とか思想の問題が入るのかなと思います。私たちの国の太平洋戦争の決定的な誤りの一つは、軍事が政治を支配下に置いたということです。

2つ目です。特攻作戦、玉砕という、どの国も選択しないような作戦行動を戦略・戦術として採用したということ。これは、十死零生のこういった作戦を平気で行った軍事指

導者たち、その責は重いと思います。その責を私たちは深く批判し、そして検証して、次の世代へ伝えていかなければいけない。

しかし、これは政治とか思想の問題ではないかわりに、文化とか伝統の問題です。私たちの国はそれほど命を粗末にし、江戸時代から含めて日本の共同体の中に、こんなむちゃくちゃな特攻作戦や玉砕を許容する、そういう戦術を許容する文化的風土はなかったはずです。それが、こういう作戦を平気で採用したとするならば、近代そのものの受け入れの中に、日本の指導者たちの体質があったということ、これをやはり徹底的に批判しないと。政治や軍事の側で批判するのではなくて、文化や伝統の側で批判する。

いまに至るも、特攻作戦や、あるいは玉砕を、ある意味で言えば美化する向きもあるけれども、特攻に行った人たち個々に私はそれぞれの思いはあります。しかし、戦略・戦術として、こういう採用をした太平洋戦争は、私たちの国の文化や伝統に反するという一点で批判しなければいけないと思います。それが2つ目です。

3つ目は、20世紀の戦争はルールがありました。どのような形であれ、ルールのもとで行われました。特に第一次世界大戦が科学技術の発展等によりあまりにも悲惨な状態に陥ったために、ルールをつくった。例えば捕虜の扱いをめぐるルールがあった。捕虜の扱いは1907年、早くからあったにしても、いろいろな形でルールがあった。パリ不戦条約を含めてあったにもかかわらず、私たちの国は残念ながらそういう国際的ルールを無視した。ルール無視の戦争をやった。そのことは私たちの国の、やはり20世紀最大の恥ずかしさだと思います。戦争がいい悪い以前の問題として、ルールなき戦争をやったことで、この国の体質とか歴史が問われるということ。それは問われても仕方がないと言えるのです。

この3つ、軍事が政治を支配したこと。特攻作戦や玉砕という日本の文化や伝統に反する戦略・戦術を用いたということ。国際的

ルールに反したということ。守らなかったということ。この3つは、私は太平洋戦争の反省点だと思います。教訓だと思います。この教訓をもって次の世代に伝えていくということが大事なかなと思います。

戦後70年というのは、誰がどのような意見を持とうが自由ではありますけれども、それぞれがこの70年の空間の中で何を学んだのかを次の世代へ伝える、伝えるべき学んだことを継承していく、そのための踏み台だったとも考えていいのではないかと思います。この3つのことを言いたいということが私の話の前書きなのです。

昭和天皇実録の意義

きょうの話は、昭和史から何を学ぶかということ。学ぶことは実際にあまりにも多いのです。私は昨今の情勢と照らし合わせながら、例えば8月の終わりでしたか、昭和天皇の実録を24年5カ月、25年の時間をかけて宮内庁の書陵部が編みました。これは1万2,000ページに及ぶ大変な労作といえますか、昭和天皇とはこういう人だというようなことを国が、官が、あらゆる史料を使って報告書のような形で歴史の中に提示しました。私たちのもとにも提示しました。

たまたまこれを読む機会があつて、大体はほとんど読みました。読んで思うところ多々あります。しかし結論を言えば、よく書いたなど。国は、やはりこういう天皇像を伝えたいのだというのがよくわかります。その天皇像について、特に異存があるわけではありません。国は、官は、やはりこういう天皇像を伝えたいのだ、それはやはり了解しよう。しかし、それは昭和天皇の全実像の50%である。残りの50%は民の側、つまりもっと言うと、アカデミズムやジャーナリズムが、それぞれ与えられた史料の中で、それぞれの見方の中でつくっていく必要がある。その民の中でつくっていく昭和天皇像と、今回、官がつくった昭和天皇像を合わせて、それを100として歴史の中へ入れていく。そして歴史の判断を仰ぐ。歴史の次の世代、次の世代

へ伝えていくということが大事ではないかなと思います。

国のイメージしている、あるいはつくった昭和天皇像に、異存がないのは全ページ読んでのことです。結論を言えば、例えば戦争を取り上げます、開戦を取り上げます。開戦のプロセスをみると、昭和天皇は、本当は戦争はしたくない、戦争という選択をしたくない。それが、昭和16年7月、8月、9月、10月、11月、少しずつ、やむなしだなど。戦争という選択しかないかとなっていく、その姿勢が『実録』では丁寧に書かれています。

軍で言えば参謀本部とか海軍の軍令部ですけれども、臣下の者が天皇に、もしいま戦わなければ、この国は自存自衛できない、自立することができないというふうに説得していきます。説得をもって天皇にあらゆる資料を提示し、そして天皇の決断を求めていきます。

天皇を追いつめた軍事指導者たち

私たちはこの『実録』の中で、これは昔から私が思っていたことが共感できるという意味で『実録』に賛成です。天皇は好戦主義者でも平和主義者でもありません。そういう問題の設定はおかしいです。昭和天皇にとって一番大事なことは、皇統を守ることです。皇統を継続させることです。皇統を継続させるために、戦争という手段しかないか。戦争という手段しかないのなら仕方がない。平和という手段がないのならそれでいく、という選択肢の問題だと思うのです。

昭和16年の戦争に入るプロセスを、ずうっと丹念に追いかけていきます。これは、細かい経緯はともかくとして、政治的・軍事的指導者たちが、臣下の者が失敗した政策の積み重ねで、やがて9月、10月、11月という状況になるのです。そのときに、このままでいくと国は自存自衛できない、戦う以外に選択肢はないというような状況に、天皇はだんだん追い込まれていきます。天皇はやむなしというふうに傾いていくのですね。

そのことが、私は3段階の構えで書いているかなと思います。このとらえ方はかなり妥当だと思います。この妥当な、政治的・軍事的指導者たちが失敗を積み重ねていくうちに、これしかない、このままだと自存自衛できなくなるに至る契機は、全部政治や軍事の失敗にあります。

例えば最も直接的なのは、昭和16年6月22日、ドイツがソ連に入っていきます。独ソ不可侵条約があるにもかかわらず、ドイツは、ヒトラーがスターリンに戦争を挑む。

これを機に、日本は三国同盟を結んでいます。ドイツとともにソ連を、シベリアから関東軍を送って挟撃するか。北進論。いや、そうではない、自存自衛の体制をつくるために南方へ進んで資源の確保をしようか。南進論——のどちらを選ぶかで、国策の中核では議論があります。

南進論を採用しますね。南部仏印に進駐します。軍を送ります。しかし、北進論、関東特殊演習——関特演というのですが、関東軍に兵馬、戦車、兵士というのを次々送ります。つまり、ソ連と一戦を構えるぞという構えを見せます。南部仏印に実際は軍事進駐し、そして北進論ではデモンストレーションをします。

これは、アメリカは怒らないだろう。7月2日の御前会議などで、日本が本気で戦争覚悟で入っていくのだから怒らないだろう、という見通しのもとに入っていきます。全然、逆になりますね。アメリカは激昂します。国内の対日資産を凍結し、石油の全面禁輸に踏み込みます。それがきっかけになる形で日本はだんだん追い込まれていくのです。もし8月、9月、10月に、政策担当者たち、軍事指導者たちが考えるとすれば、自分たちの見通しは誤った、というところを手直しすることから、始めなければいけないですね。その手直しを全然しないで、誤って、そしてアメリカが激昂し、イギリスもオランダも追随した。そして対日資産は凍結だ、石油は入ってこない。石油が入ってこない。今度、次の問題に移っていく。この無自覚、無節操、無

責任というのが、この南部仏印の独ソ戦の後の日本の政策担当者には十分うかがえます。

昭和天皇の味方をするわけではありません。そういうことを危惧していたのは昭和天皇なのです。例えば北進論というのに対して、ソ連は日本の本当の意思を見抜いていないだろうねと確認したりしています。『実録』に書いています。それは、結果的に言えばゾルゲがスターリンに電報を送って、もうわかっていたということにもなるのでしょうけれども。しかし、あまりそういったトリッキーなことをやると国際間の信用がなくなる、というようなことも言っています。南部仏印のとき、なるべく戦闘行為とかそういうのをやめてほしいということを言っています。

天皇は戦争を望んでいなかった

そして、そのまま南部仏印に進駐して、反省して、そこから政策をもう一回練り直すというのであれば、自存自衛体制で石油がない、逃げ場がない、じり貧だ、日本はどうなるのか。そういうことを一切反省点なしに、石油が入ってこない、どうする。自分たちの政策の誤りに対して、これっぽっちも反省がない。

それを昭和天皇はよく見ていると思います。もちろん、これは後知恵で、今回、『実録』を書くために昭和天皇をそういうふうに位置づけたのか、というような見方もできます。が、当時の史料をみると、いままで公開されている史料をみると、やはり昭和天皇はかなりの確なことを言っている。南部仏印のような決して軍事行動を起こしてはいけないと言う。それがアメリカとの戦争がずっと交渉がうまくいかなくなって、戦争がかなり身近な問題になってきたときに、天皇は、参謀総長だった杉山に、お前の言うのはうそばかり言っている、と。お前の言うのは信用できないと。お前は南部仏印に行ったときに、例えば南部仏印に進駐したらアメリカが怒るであろうと。そしてそれは対日石油禁輸にもなるであろうというようなことを、お前はそれを私に言わなかったではないかと。いま、

南部仏印に進駐すれば、アメリカは多分石油をとめるかもしれませんが、それは前からわかっていたことで、と言ったのです。そして天皇が、お前は何を言うかと。お前はいま初めてそれを言ったのではないか。あのとき、それを言っていないではないか、と言う。

つまり、ここから何がわかるのでしょうか。天皇をすべて正しいとは思わない。しかし開戦に至る経緯の中で明らかにわかることは、愚鈍な政治・軍事指導者たちが、このときの時代の最高のメンタリティーの持ち主でない人が、指導者に当たったという不幸が出ているのです。この時代にもっと優秀なスタッフはいっぱいたのに。もっと優秀な、例えば統帥権の問題にしても、軍人の中には、統帥権干犯などと軍人が言うのなら、憲法を変えなければいかん。それで言わなければいけない。どうして政治家の言うことを聞かないのだという人もいる。そういうことを言う人も何人もいる。アメリカの情報を客観的に分析したうえで、きちんとアメリカとの政策を考えるべきだ。思い込みや、通り一遍の情報だけでやってはいけない。そんな人が、いっぱいいたのです。どうしてそういう人が中枢に來れなかったのでしょうか。そこが問題なのです。

昭和天皇は、自分の目の前にあらわれた指導者たちが、その人しか知らないから、その人のはるか先にみえる日本の軍の中には人材はいるということ、それを知らない。多分その中で怒ったり、腹を立てたりして、しようがないか、ということで戦争へ行行ったということ。です。

天皇の悲しさと悔しさ

『実録』を読んでいくと、こういうことがよくわかります。それは、天皇の戦争責任を免罪にするとか、肯定するとかという意味ではありません。大日本帝国憲法が天皇を主権者として統治権、統帥権の総覧者として規定していたにもかかわらず、その実態、大権は臣下の者に付与していましたね。しかし「君臨すれど統治せず」の間で、現実の政治と軍

事が、いかに腐敗したか。いかに形骸化したか。『実録』の執筆者は、一言も書いていません。読んでいったときに、私たちはそこから読み取ることができる。

読み取ったときに、この天皇の悲しさ、悔しさは、大きな歴史的な遺産であると。私たちは、そのことをこの『実録』からくみ取る必要がある。天皇に過重な責任を負わせてはいけないのだということも教訓かと思えますね。大日本帝国憲法のような形の天皇制のあり方は、やはりいけないのだということを『実録』の中から感じ取ることができます。このように『実録』は幾つもの読み方ができるのですね。

もう1つだけ補足しておきます。私たちは、天皇との間に大きな意識の違いがあります。それは、この『実録』ではもちろん書いていません。どういうことか。

ある例を具体的に挙げますと、昭和28年に昭和天皇は最後の行幸地を北海道と定めて、北海道の国民体育大会へ行きます。北海道を行幸するのです。全国巡行の最後です。なぜ最後だったのでしょうか。

これは『実録』を読むと、北海道はソ連との最前線であり、国境を接している。天皇が北海道へ行っている間に、幽閉されたりしないのか。GHQなどが、ソ連の何らかの軍事行動を懸念しているということが、『実録』の背後からは浮かんできます。そういったニュアンスが出てくるのです。

しかし、そのことは、マッカーサーの後を担うリッジウエーという司令官が、天皇に6回会っています。それも『実録』に書いています。その6回目の、独立を回復する昭和27年4月28日の1週間ほど前にも最後に会っているのです。そのときリッジウエーは、われわれの国は、北海道をソ連からどうふうを守るかというのを説明したとあります。どういう説明をしたかは書いていませんけどね。

こういったことをずうっとみていくと、天皇とGHQの間で、現実の政治的な危機意識

というもので、共有するものが幾つもあるのだなという感じがします。マッカーサーとリッジウエー、マッカーサーとは11回会っています。その中で1回しか今回は公表されていません。残りの2回から11回の中には、かなりやはり天皇は政治的な発言をしたであろうということは推測できます。

それは一部漏れ伝わってきていますね。例えば日本が侵略されたらどうしますかというようなときに、マッカーサーは、カリフォルニアを守るがごとく日本を守りますよと言ったとか、漏れ伝わってきています。

つまり、昭和天皇のその発言は、人間天皇、象徴天皇としての枠を逸脱していると思われるからです。だから多分それは載せなかったのだらうと思います。奇妙な表現ですけども、それはそれですごくいいことだと思いますね。そういうことを国や官が載せないかわりに、民の側がそれをきちんと例証していく必要がある。それを合わせて100%だということなのです。

人間天皇としての北海道行幸

もう1つ、さっき微妙な問題があったこと。どうしてもこの『実録』の中からくみ取らなければいけない問題があります。昭和28年、北海道を行幸した後に、昭和天皇は札幌から飛行機で東京へ帰ってきます。その記述の中に、初めて飛行機にお乗りになったと書いています。昭和天皇は昭和28年まで飛行機に乗らなかったということですね。

ここを読んだときに、1行の中に、ちょっとした形容詞、副詞、動詞の中に、すごい意思表示が含まれている。初めて乗ったということですね。若干そういうのがわかるので、「えっ？　じゃあ貞明皇后は死んでいるんだ」。貞明皇后は昭和26年7月に亡くなっています。貞明皇后が亡くなったから飛行機に乗ったのですね。

なぜ貞明皇后が亡くなったから乗ったのでしょうか。貞明皇后は大正天皇の皇后ですけども、先駆的な、革新的な、利発な皇后

です。しかし、神話からでき上がっている天皇というものは、神の末裔と思っています。これは、記紀から始まる中で、日本の天皇制の始まりが神話から始まっている。その神話の継承者であるということは、その末裔であるということですね。それは、私たちと天皇、あるいは貞明皇后と、決定的に解釈の分かれるところです。私たちは、神の末裔と思う人もいるでしょうけれども、思わない人もいます。いまは思わない時代に入っているわけです。しかし、貞明皇后は宮中祭祀や神権化している行事に対して、極めて謙虚であり、そのことを息子の昭和天皇が守らないと思うときは、激しく叱責しました。

その皇后が、天皇が大正 10 年にイギリスへ行く際に大反対します。日本の神話の末裔が、どうして異国の文化と触れ合わなければいけないのか。それに対して、牧野伸顕や原敬などが説得します。これからの時代はそういう時代ではないのだと言って説得します。貞明皇后は了解します。

しかし貞明皇后は、神は空中に浮遊してはいけません。地に足をつけているということが絶対条件ですね。これは、このこと自体をずっと長く論じなければいけない。飛行機というのは、天と地の間を浮遊することです。神の末裔は、そういう状態にあってははいけませんということですね。

このことはすごく重要な問題なのです。日本の歴史の、天皇と私たちのことを考えるときの重要な問題なのです。この問題は、一番顕著にあらわれるのは、昭和 21 年 1 月 1 日の人間宣言です。これは「新日本建設に関する詔書」と言います。アメリカが、あるいはGHQに近いアメリカ人などから、天皇は神ではないというような宣言を出してほしいと。そのほうがいいよというような助言もあります。それを受けて幣原内閣、文部大臣の前田多門などが、ではそうしようと言って文案づくりに入ります。昭和天皇の侍従次長は木下道雄といひます。木下道雄の『側近日誌』というのが、12月20日から12月31日までどういうやりとりがあったかというこ

とを書いています。重要なことが書いてあります。

どういことが書いてあるか。天皇が神の末裔であると信じた日本人が、自分たちもまた末裔の民であると信じて世界を制覇するという誤ったこと、これは「八紘一宇」を言っているわけです。けれどもこうした考え方は捨てなければいけないというような文章を入れるのです。GHQと前田多門とのやり方の中で、天皇を神の末裔と信じる国民が、自分たちもまた末裔の民だと思って、そして世界を制覇できると思うのは間違いである

と。そのとき、天皇を神の末裔とするところが間違いであるとする文章に関して、宮中周辺は猛烈に抗議をします。そのところはおかしい、そうではないと。その天皇は神の末裔であるという文章は、いかなることがあっても否定するようなものは入れないと。

木下道雄の『側近日誌』にあるのでは、天皇はそのことを了解していると言っていますね。かなり微妙な問題です。これは同時に、天皇制のあり方の政治的統治システムの中の現実的な天皇の問題と、もう1つ別な、神話の中の天皇のあり方についての問題が、2つの側面が出ているわけです。けれども、『実録』は、やはりそここのところの人間宣言ができるプロセスのところ、天皇を神の末裔とするということを否定するという宮中周辺の人たちの意見のところについては触れていません。なぜ触れなかったのだろうと思ひますね。

「天皇実録」の行間を読み解く

これは、天皇を神の末裔とするとかしないという問題以前に、私たちの国の天皇を論じるときに避けて通れないところだからです。これが、政治的な統治システムと合体した形で昭和の異様な天皇を神格化した空間がつくられたわけですから、ここのところをはっきりしておかなければいけない。しかし『実録』はやはりそこをはっきりは書かない。そのところがやはり天皇のイメージをつく

っているということで、それもまた悪いことだとは思わない。そのことについては、また民の側が深く検証していく必要があると思います。

『実録』は、もっともっと読むと、1行1行の中に、例えば私はそのとき初めて飛行機に乗ったとか、「初めて」という言葉を書いた。この人はメッセージを送っているなというふうに感じます。そういうところは随分あります。そういうところが幾つもあるというのを読み抜く力というのは、実は天皇制を考えるときの基本的な要因、要件だと思いますね。それがないと、天皇というものをどういうふうに考えるか。日本の天皇制をどういうふうに考えるかということが、全体図がわからないのではないかという感じがいたします。

昭和史を考えることは、1つには天皇および天皇の統治システムに対して、きちんと考える。元首にすればいい、主権者であるからだ、それでいいという問題ではない。昭和史はその中で、単に元首であるとか、主権者であるというようなことが、どういう矛盾を生むのかということを示している。その矛盾を教訓化せずして、簡単に元首であるとか、主権者であるなどという論を吐いてはいけません。

昭和史の中で一番重要なことは、1つにはやはり天皇の問題である。と同時に、基本的には昭和史の中から何を学ぶかという、あの戦争のことになります。私たちの国のあの戦争にどういうふうに向き合ったか。

いま、戦後70年と言いますね。太平洋戦争が終わって70年。その間、日本は戦争をしていません。逆に考えれば、日露戦争が終わったときは1905年ですね。それから70年、1975年のとき、日露戦争が終わって70年なんていうのは、誰がそんなことを言ったでしょうか。誰が、日露戦争が終わって70年なんて言って特集を組んだのでしょうか。では、なぜ太平洋戦争は70年という特集が組まれるのか。私たちは、なぜ戦後70年と言うか。

それは実に簡単で、70年という空間は、私たちにとって、たかが3年8カ月。たかがという言い方は誤解を生むと困ります。3年8カ月の時間帯。中国との戦争を入れると7年。満州事変から数えると14年。この昭和の14年。特に中心になるのは7年。これが70年たって、いまもやはり戦後として総括し切れていないということですね。このことが、やはり、なぜ70年と言うのだろうかということ、基本的なところで考えなければいけないと思います。

「戦後70年」を語り継いでゆく

70年というのは、くどいですがけれども、日露戦争のとき、70年たって1975年のとき、日露戦争の70年だよというとき、誰が生きていて、どの人がどうだなんて考えてもいない。しかし、いま70年というと、あの戦争に行ったときのあの人たち、20歳で行った人が90歳なんだよとか。この70年というのは何だったのかということですね。この70年をなぜ「戦後70年」と言い続けるのだろうかということを考えないことは、歴史に対して不謹慎過ぎると思います。私たちの国は戦後70年と言わなければいけないほど、考えざるを得ないほど、あの戦争の中に多くの禍根、未成熟な、近代人足り得ていなかったシステムなど、いろいろなものを抱えていたということですね。だから70年ですね。簡単にほいと捨てていい70年ではないということなのだと思います。

これは、くどいけれども、こうやって70年語り継いでいる私たちの国は、ある意味で誠実なのだと思いますね。誠実だから、やはり合わせ鏡のように、真ん中に鏡を立てて、こっち側の7年あるいは、3年8カ月が、70年もの時間帯で相似形をなしている。時間にはるかにこっちは大きい。しかし質的にはそれに匹敵するような、私たちに突きつけている問題があるのだ。というふうには考えなければ、この70年は全くの徒労でしかない。むだな時間になる。

あまり現政権を批判したくはないけれど

も、現政権の最大の問題点は、この70年に対する謙虚さが無いということだと思いますね。謙虚さが無いということは、この70年の前の3年8カ月をきちんと検証するという気があるのかということを知りたいと思います。

伊東正義とか、後藤田正晴とか、宇都宮徳馬とか、自民党の保守政権のかつての人たち、はどれほど謙虚に、あの戦争を分析し、保守政治の中に取り入れていったか。ということに対して、私たちは徹底的に学ばなければいけないと思いますね。そういう学びが70年のはずなのです。それが全くない。「何なんだ、これは」というふうに言いたくなるのですが。言いたくなるのも、むべなるかなというふうに思っしてほしいと思います。

あの戦争の最大の問題点は3つあると言ったほかに、若干補筆、加筆します。

昨今の問題に触れていきます。従軍慰安婦の問題です。従軍慰安婦の問題の論争に一切かかわっていません。従軍慰安婦の問題は、昭和史を多く調べてきましたけれども、かわらない理由はたった1つ。軍隊と性というのは古代ローマからの基本的な問題なのです。軍隊と性というのは、基本的な古代ローマ、ナポレオンのときも、元のときも、どんな軍隊も、悩み悩み抜いたのは性です。性病です。日本の軍隊も、陸軍大学校の教育では、性病の教育をします。性病をどうやってやるかではありませんよ。

軍隊と性

100人の兵隊がいた部隊があったら、その中で15人の性病感染者が出たら、それでその軍隊は終わりです。軍隊の体をなしません。戦うことができなくなる。つまり、性病というのは最大の敵なのです。どの国もそうです。軍隊と性というのは、なぜ性はあれかと言ったら性病です。性病の管理です。これをやらない軍隊はどこにもありません。やらないとするならば、それはその国が、基本的な軍隊というシステムを全く考えていないということです。

私たちの国の陸軍大学教育、将校教育で、性病が伝播してはいけない、兵隊が性病にかからないように十全に注意しなければいけないということをやります。

実際問題、性病はやはりかなり多いのです。日清・日露、第一次世界大戦、日本は特に昭和の戦争でもいいのですが、例にとっても、軍の兵隊たちは病気になると軍の病院に入ります。第一病棟、第二病棟、第三病棟と言う。第一病棟は内科です。第二病棟は外科です。第三病棟は性病科なのです。第三病棟は「三棟」と通称言われている。日本陸軍の中で、将校同士が「お前のところにいま三棟に行っている者いるのか」「3人いるんだよ」という会話をします。それは例えば150人の部隊、200人の部隊でもいいのですが。そういう「三棟帰り」という性病の者を抱え込むと、軍が死んだ状態になる。

兵隊たちの教育の中に、これは明治からですけれども、性病感染者が出たら、それをすぐ隔離し、消毒し、風呂のたらいとか全部かえろ、とまで書いてあります。寝具はもちろん全部かえろ。つまり、性病に対してこれだけ恐れおののいているのです。これは日本だけではありません。どの国も、性病というのは軍隊の中の基本的な大問題です。

このことをまず全体に知っておけば、すぐにいろいろなことがわかります。軍が性病を恐れて、そうすると性の慰安所、性の施設、性の注意というのは、軍は総力を挙げます。問題は、そのときに慰安所をつくったときにどういう形でつくるか。本当言うとこれは、軍の慰安所の問題、性病の問題、一番詳しいのは軍医なのです。軍医と、あまり言えないけれども、主計将校です。主計将校はお金を動かしますから。彼らは絶対に言いません。軍医さんは私、何人も取材して知っていますけれども、言わない。「悲惨だよ、とにかく」ということですね。

ここで、そういうプロセスは省きますが、2つのことを言います。

1つは、どのような軍隊でも、どこへでも

駐屯すれば、そこに必ず現地の売春婦が寄ってきます。これはどの国もそうです。日本でもそうです。日本はビルマ、インドネシア、ニューギニアなどに次々進駐しました。駐屯地ができます。そこに必ず現地の売春の人が寄ってきます。絶対に関係を持つてはいけません。炊事当番の人のところへ行って、食事をくれないで寝ますなんていう人がいる。絶対に関係を持つてはいけません。しかし、関係を持つてのですね。それで何人かの人が病気になる。軍医はそれをみて、全部どういう病気になるか知っています。その軍医が書き残したものは、公式に残したものは滅多にない。しかし、彼らの話を聞いていると、彼らが仲間内で書いたものを読んでいると、やはり性病の怖さというのを書いています。それは、現地の人は必ず来るのだと。とするならば、慰安所はつくらなければいけない。

その慰安所をつくる時に、それは大本営が命ずるのではなくて、現地裁量ですから、あるところの師団長は兵隊たちにアンケートをとります。駐屯しているところで。お前たちは何が欲しいか、欲しいものを書け。順番を書け。甘いものが食べたい。家族と文通をしたい。自由時間が欲しい。兵隊は、恐るべきほど性の充足をしたいという欲求は少ないのです。性の充足をするというのは、戦況がある程度——こういう話はちょっと微妙だから。と言いながら、やはり知っておかなければいけないので言います。20歳ぐらいの兵隊は、性は欲していないです。家族と文通したい。甘いものを食べたい。戦況が悪化していきます。次々招集兵が呼び出されていきます。招集兵は妻帯者です。年齢もいつています。むしろ、性はそういう兵士たちにとって大事なのですね。だから、戦争初期のとき、新兵が多いような部隊でアンケートをとった、ある師団長が。慰安所をつくってほしいというのはほとんどなかった。甘いものが食べたい、家族と文通がしたいということなのですね。

つまり、軍隊と性というものを考えたときに、軍隊は性の空間というものをつくらなけ

ればいけない。これは日本も、どこの国もそうです。問題は、そのときに業者に頼むわけですね。そこからです。そこからいろいろな問題が発生する。このことについては軽々にいまここでは言えない。そういう形で性は必要だということ。

もっと言いますと、ニューギニアのほうに駐屯したある軍医が、慰安所に行く兵士たちのアンケートを個人的にとった。そのときに、みんな性が目的だろうと思う。違うのですね。自由時間が欲しい。だから、女性にお金をやって、学徒兵は哲学書を読んでいる。1時間。あるいは、そこでぼんやりしている。つまり、性の空間というのはある意味で密室ですから、自由時間になる。学徒兵が一生懸命そこで哲学の本を読んだりしている。つまり、慰安所のそういった性格をきちっと考える必要がある。

「慰安婦」にも階層が存在

そして、そういった慰安所の中で、これもまた検証しなければいけない問題として言っておきます。兵隊と将校と司令官の性は違います。兵隊はほとんど、言葉は汚いけれども、性のために慰安所に並びますね。将校は並びませんね。将校は慰安所とは別な女性ですね。

この間、オランダの外務大臣が言った発言を聞いて、そういう事情を知っている者はびんときたはずです。例えばオランダやイギリスの収容所で、体を売っていいという女性があります。あるいは強制的に売春をさせられる人がいる。そういう女性。あるいは、現地の普通の人とは違うレベルの女性。将校用といえますか、そういうような女性。

オランダの収容所で、日本の将校相手に関係を持った女性に子どもができます。戦争が終わった後、オランダへみんな連れて帰りましたね。その人たちは日系になるのですが、その人たちはもう60代、70代です。どんな生活をしたでしょうか。オランダの社会の中でどんな生活をしたでしょうか。その人たちが受けた屈辱、そしてそれについての補償は、

日本は一切していない。オランダの外務大臣が言った言葉が3~4日前の新聞に出ています。従軍慰安婦の問題に関して日本の見解は全く納得できない、と言っているのが出ているのです。だからそういう問題をきちっとみつめなければいけません。70年というのは、そういうことをほとんどみつめてこなかったときです。

司令官の性についてだけ一言言います。ある戦場で司令官が亡くなりました。そこに芸者さんがいました。なぜ彼は神楽坂や新橋の芸者を連れていったのでしょうか。私たちの国の軍隊の中には、いろいろな不合理があります。そういうことをきちっとメカニズムの中で、個々のケースを含めていろいろなことを考えて論じることが、まず基本的姿勢ですね。そういうことを抜きにして「従軍慰安婦」という言葉でくくった瞬間に、問題はかなり矮小化する。と同時に、現代的な問題でしかなくなる。

アメリカは、もちろんあの戦争のとき、自分たちの地で戦ったわけではありません。けれども、ローテーションで戦争をします。ベトナム戦争もそうでしたけれども。1カ月ある部隊が戦って、また彼らは帰ります。例えばベトナムで戦ったのは、佐世保や横須賀やバンコクやマニラへ帰ります。別な部隊がまた来て1週間戦って、またローテーションでやっていきます。佐世保や長崎や横須賀やバンコク、マニラへ来る。そこへ奥さんと呼べ。あるいは、お前が性的な充足感を得たいなら、その地で自由恋愛しろということですね。

そういった、ある意味で言えば20世紀の従軍慰安婦問題を論じるときに、もう1つこれ忘れていけないのは、その国の政治システムが、デモクラシーのシステムとファシズムのシステムとで、軍隊と性の取り組み方が違ったということ。これをやはりきちんと考えないと、問題はみえてこないと思います。

いまの日本のこの論争に加わる気がないのは、こういったきちっとした事実が押さえられて論じられているのではないからです。何かあまりにも軽率というか、表面的過ぎるな

というように思います。

「慰安婦問題」の本質とは

それから兵士たちのプライドのために言っておかなければいけない。前線で戦って命をやりとりする兵士たちは、そこに従軍慰安婦とか女性を連れて戦っていた部隊なんかありませんよ。そういう駐屯しているところが日常ですから、そこには慰安所ができますけどね。しかし前線で戦っているところに慰安所なんかありません。女性なんかいませんね。ただ、駐屯しているところが前線になったときには、そういう人たちも死んだりする場合があります。前線で戦っている兵士たちが、女性を連れて歩いて戦っているかのごとき言説をなすというのは、日本の兵士たちのプライドから言っても、あまりにもひどいのではないかと。

私たちの国の軍隊と性の問題は、あまりにも局部的、微小的にすぎます。もっと根源的なところから軍隊と性というものを論じなければいけない。

私はある時期、国会図書館に入って、昭和史を勉強するために、明治とかそういうところの本を徹底的に読みました。明治13年、佐賀藩の下級武士が墨字で、「明治新政府に提言す」というので文章を書いているのです。多分、彼はやむにやまれず書いて、とじて、明治政府に届けたのでしょう。一下級武士が。それは性病についてです。なぜ江戸時代の末期に武士の間で性病がはやったか。それは、いかにその性病を防ぐために苦勞したか。性病というのは亡国である。軍隊に関して言えば、軍隊を滅ぼす大事な敵なのだというようなことを書いています。

明治政府も、そういった性のことに関して言えば、日清・日露のときはまだ正直言ってコントロールする力というのがない。そういうものを具体的につくったとは言えない。主に現地の売春の人が寄ってくるというようなことだったのでしょうけれども。だけでも、20世紀の戦争にルールがあるとさっき言ったことは、性の問題に関してルールがあっ

たということですね。そのことを論じないと、もっと広範囲に土台から論じていかないと、問題はみえてこないということを、やはり考えなければいけないと思います。

従軍慰安婦問題に、全く論争にかかわる気はないし、かかわって、ああだこうだとあげつらう気もない。どうこうするあれもない。けれども、問題の本質をずうっとみないで、表面だけで論ずることの、現代社会というのはそれだけ逆に言えば歴史に対して失礼ではないかと思えます。このことは70年の間でまだまだわからないところ、隠蔽したところがありますね。

もう1つだけ例を挙げて話を終わりたいと思います。いろいろなところへ講演に行きます。講演に行ってもうしてこの町は、この市は、この地区は、こんなに鈍いのだろう、と思うときがあります。

例えばアメリカ軍が日本に爆弾を落とした数、それで死んだ人の数。大体2,000人、3,000人、800人とか700人。しかし、ゼロ、1人、30何人とかというところがあります。島根、鳥取、長野、山形、京都という地は、アメリカの爆弾が恐るべきほど投下されなかった。だから島根などは、投下爆弾がほとんどゼロに近い。戦争へ行って死んだ人はいますよ。しかし、そこへ住んでいた人で死んだ人はいない。もちろん広島と長崎と東京は圧倒的に多い。名古屋、愛知県も多いというような数字、何万人という数字が出ますけれどもね。

なぜこれらの地は少なかったのだろう。単純ですね。軍事施設がなかったからです。軍事拠点がなかったからです。島根、鳥取、山形、長野、京都、軍事施設がなかったから爆弾を落とさなかったのです。

ではもっと考えましょう。どうしてアメリカはそれがわかったのだろう。どうしてここに軍事施設がないというのがわかったのか。

捕虜からの情報収集

そのことをもっと考えると、日本の捕虜に

アメリカは、「お前のところの土地に、お前が愛知県名古屋出身なら、軍事施設があるだろう。それを言いなさい。爆弾を落とすとみんな民間の者が死ぬのだから、軍事施設のあるところ、飛行場をつくっているところがあったりしたら、それを言え」と。

どうですか。日本の将校も兵隊もきちつと言いますね。「あります。名古屋のここに何とか飛行機の工場があります。この工場の見取り図はこういうふうになっています。ここは絶対に落とさないでください。なぜなら、ここは工員の宿舎です。ここが工場です」。全部あれしますね。そういうディテールをつくります。

アメリカはそれを、本当を言っているかということでも偵察します。何千枚もの写真を上空から撮って偵察する。そして、そのとおりでわかれば、そのとおりで爆弾を落とす。もちろん誤爆もあったでしょうけどね。

だから、1つのところにアメリカの爆弾が全く落ちないというところをみていくと、あ、軍事施設がないんだな。しかし、どうしてアメリカがわかったんだろう。それは捕虜が言ったんだな。捕虜が言ったということは、この捕虜というのはここまで詳しく知っているんだなとか、いろんなことがわかりますね。

70年というのは、そういうことがわかる時間帯でもあったから、太平洋戦争の精密、緻密、そしてその論点を明確に出せるのです。そういうことを私たちはともすれば避けている。もう一つ言えば、軍人恩給です。なぜ上の人に……。兵隊は昭和17~18年、給料は15円とか20円ですね。そんなにもらわないのもある。二等兵なんかそんなものです。将官はどのくらいですか。年俸6,000円ですよ。桁が違う。戦後の軍人恩給はどうしましたか。全部その単位でスライドしてもらったのですよ。兵隊はほとんど涙銭。しかし、将官は莫大な、高級サラリーマン並みの年金をもらう。こういった不合理なところに、私たちの国のいろいろな問題が、ほとんど整理されないままに70年過ぎたのです。

私たちは次の世代に、軍人恩給1つ調べてもそうですが、やはり恥ずかしいと思う。私たちの国が戦争に幾ら金を使ったのですか。いまだにわかりません。なぜなら、昭和12年7月7日に始まった日中戦争は、毎年、軍は臨時軍事費、臨時軍事費で、一般会計予算の中の軍事予算を上げると同時に、別途で、領収書も要らない臨時軍事費というのを積み重ねていって、一般会計予算に匹敵するほど臨時軍事費を使いますね。

戦後70年を経て見えてくること

私たちの国の戦争は、昭和12年7月7日にプロジェクトが始まったのです。1プロジェクトが。これは、戦争が終わったときに、このプロジェクトは終わりなのです。そうすると、そのとき幾ら金を使ったか、われわれの国はこの戦争に幾ら金を使ったかという計算をします。そして相手方に賠償請求する。勝つという前提ですよ。負けました。資料を燃やしました。幾ら金を使ったかわからない。

しかし、自民党の河野太郎のように、こういうことがわからないということ自体おかしい。一生懸命調べている人がいますね。河野太郎さんは偉いと思うけれども、そういうふうに一生涯調べている。私たちの国は日中戦争で幾らお金を使ったのかということ、私たちは知らない。

アメリカは、昭和20年の10月、11月、12月に戦略爆撃調査団を送ってきます。8,000人から1万人のスタッフです。日本全国に行きます。全部資料を燃やしたにもかかわらず、一生懸命いろいろな関係者を呼んで話を聞きます。資料も集めます。そして膨大な資料をつくりますね。

ナショナルアーカイブへ行くとみることができます。「何であなたたちはそんなことをやったのか」と、アメリカの研究者に聞いたことがあります。彼らは、「えっ？」という顔をしましたね。「だって、そうだろう。納税者に説明しなければいけないんだよ」。増税しましたからね、第二次世界大戦のとき。増税した。あなたたちの税金を上げることに

よって、これだけ軍事費に回って、ファシストの国をやっつけたのだという報告書を書かなければいけない。それで戦略爆撃調査団の膨大な資料をつくった。いまでも私たちが使っている資料は、戦略爆撃調査団の資料だったりもします。全部とは言わないけれども。恥ずかしいことですね。こういったことが70年の中に幾つも、あまたあります。

そして政治の中で、一生懸命こういうことをコツコツと調べている若い代議士さんはいます。河野太郎さんや長妻昭さんのように。長妻昭さんは年金のことが詳しい。そうではなくて、長妻さんは前から、戦争のときの海外からの引揚者の現実は何のくらいになって、どうなっているかということ、きちっと厚生省などに資料を請求して、戦争の実態を明かそうとしています。

やはりそういった、日ごろ新聞にはみえない、代議士の人でもそうやってコツコツやっている人たちに比べて、日本は侵略したわけではないとか、そんなことはなかったとか、というだけで言説をなしているのと比べて、どちらが誠実さがあるのだろうと考えます。70年は、そういった誠実さに対してきちんと整理して歴史につないでいくことが大事なのだと思います。

<質疑応答>

司会 いまのお話の中でも、昭和史から何を学ぶかと。戦後、いわば民主主義国家になって、メディアも自由に発言をしている。その中で本当にメディアが果たす役割は何なのか。政治家としての誠実さと並んで、メディアとしての誠実さについても訴えられたと思いました。

きょうの議事進行を務めさせていただいている当クラブ企画委員でテレビ朝日の川村と申します。1点お聞きします。かつて当クラブに来られたときに保阪先生が、シリーズ国境の問題だったと思います。いわゆる戦争と戦争の間を「戦間期」というふうに呼んでおられて、いまの昭和の歴史から、戦後いま70年たとうとしているときに、私たちメ

ディアを含めて、何を一番ポイントとして伝えていかなければいけないのか。先ほどちょっと触れられておりました象徴天皇以降の問題で言えば、戦後の歴史教育が、ここに来て、戦前のことをきちんと伝えているのか。昭和史のことを伝えているのかという、少し疑念を持ちました。この戦間期という点と、いまの政治、メディアの役割ということからすれば、70年たって何を一番先生は訴えられたいのでしょうか。あるいは昭和史の天皇の実録等含めて、戦前が軍部と一体化した情報を流してきた。それに対して、戦後、いま、ある意味ではかなりメディアも政権と一体化しているのではないか。その点、何か解説していただければと思います。

戦間期の記録から戦争の否定へ

保阪 いま、川村さんのお話の中で2~3点あるのを、アトランダムな形になりますが、私なりに思うことがございます。私たちの国は、戦間期というもの、つまり第一次世界大戦が終わって第二次世界大戦が始まるまで21年間ありました。それは何のことはない、ヒトラーが登場してドイツが復讐戦をやる。失われた権威あるいは国力、そういったものを取り返すための屈伏、雌伏の21年だったのを戦間期と言うわけです。そして第二次世界大戦を起こした。

私たちは、その戦間期の思想を捨てている。戦間期の思想を捨てて、広島に原爆を落とされ、長崎に落とされ、ひどい目に遭った。一方的にひどい目に遭ったという表現もおかしい。しかし、私たちは戦間期を持たないということ、やはり70年にわたって守ってきたということ。

これは歴史の中で、妙な表現ですが、一日一日、世界新記録をつくらせているのだと思います。この世界新記録をつくらせているという自覚。私たちは戦間期を持たないのだ。そして戦争そのものを否定するのだということ、一日一日、時間で積み重ねているのだと思いますね。このことは私たちの国の誇りだと思います。この誇りを基本の底辺に据えた

ところから戦後があるのだと思います。

私は左翼ではありません。左翼に対してすごい批判を持っています。私たちの世代は、多かれ少なかれ左翼体験を持っています。しかし、私たちが体験した左翼というのは、60年安保のころは何だったのでしょうか。裏返しの軍国主義のような、権威主義のようなものがありました。左翼というのは日本で運動体としては存在し得ないのではないかと思います。私たちの個々の心情の中にあるのだと。

その例を1つ言います。

「非軍事憲法」から「平和憲法」へ

いまの憲法を「平和憲法」と言ったり、「平和団体」と言うことに対して、かなり批判的です。平和憲法とか平和団体というような言い方は、傲岸不遜きわまりない。平和憲法は、努力目標です。いまの憲法は「非軍事憲法」です。軍事憲法から非軍事憲法に移行したのですね。だから非軍事を徹底的に貫くというのが趣旨です。とはいえ、現実の中で非軍事は貫けない。それが、ある種の有事のときにどうするのだというようなことがあって、非軍事憲法を手直ししていかなければいけない、というのが、戦後70年の歴史の中にあります。

それはしかし、平和憲法と最初に言ってしまったために、これを守る以外になくなってしまった。平和憲法を守る以外になくなってしまったために、恐るべきほどそういった発想、考え方が疲弊化する。

安倍さんの戦後レジームの清算は、それほど強い言葉で言う必要はないと思いますが、ある意味でそこをうまく突いてきていると思いますね。

平和憲法と言った人たちの保守化。動きがとれなくなったしまった。非軍事憲法から平和憲法へ行くためには時間と空間が必要です。そういう努力をしたのか。そういう努力をしないで、平和憲法と言っていれば、何か役割が済んだような。そうではないだろうと

考えを持ちますね。だからあえて言えば、平和憲法ではない。非軍事憲法だという意味で、この非軍事憲法を平和憲法という努力目標に近づける努力を私たちはしていかなければいけない。けれども、その努力を初めから放棄している戦後、それは何なのか、ということをお願いです。

それから歴史教育について。アメリカ人と中国人がシェアして一緒に暮らしていた話を聞いたことがあります。これは笑い話です。小ばなしです。アメリカ人が「おい、あした、おれ試験なんだ」と言ったそうです。「何の試験だ」と言ったら、「いや、アメリカ史の試験なんだよ」と言って彼は、20センチぐらいあるアメリカ史の教科書を積んだというのです。

私たちは、それどうしておかしいのと思えますね。「えっ？」と思う。だけど中国人の知識人で話していると、それだけでもゲラゲラ笑い出す。アメリカの歴史の本がこれだけなんだよ。じゃあ、おれたちは何なんだよ。天井まで届いて突き破っているじゃないかということなんでしょうね。だから彼らはそれだけでゲラゲラ笑っている。僕らはわからない。私は、2600年だという神話の側に立たないから、「200年でこんなに厚い。ふーん」と思うけれども、中国人はそれだけでゲラゲラ笑う。

つまり、そこに1つのあれがあるなと思ったのは、アメリカの歴史は、ニュートンでもワシントンでも、やはり伝記も書いている。とにかくいろいろな物語も全部入っている。そしてアメリカ人は、アメリカ人に限らず、イギリスもどこもそうですけれども、歴史を全部因果関係で、時に自己正当化のために知識として教える。知識というか、全部史実を教える。判断するのはあなたですよという形ですね。ディスカッションしなさいということです。

「歴史教育」のありかたを見つめ直す

日本の歴史教育はどうしてこんなになったのか。年号と史実のつなぎ合わせですね。

1868年、明治維新。僕もそういう教育を受けたから言ってしまうけれども。1889年、明治23年、議会制度が何とか。そういうふうに私たちは歴史を時間の中の節目で覚えている。これ、歴史を覚えているとなりませんね。何も考えないということですね。こんな歴史教育はしないほうがいいと思う。

やはり事実を徹底的に教えて、そしてディスカッションし、そしてあなたたちが判断しなさいというようなことだと思いますね。

そういった歴史教育が変わらないと、日本の歴史教育は、右派の人は愛国心の涵養が足りないと言い、左派の人はあまりにも国家主義的だと言う。それはどっちもどっちで、そんなのよりも、むしろ客観的に教えるか、あるいは本を読んで自分で勉強しなさい。それでいいのだと思いますね。年号なんて覚えていければ、辞典を引けばすぐわかることです。こんな歴史教育はやめるべきだと思います。

それから、こういうことを教えないと日本人としての何とかというのは、それはあなたの考えでしょうということでしょう。教えるべきことは、誰がみても共通の枠組みとというのがあはずです。それを教えればいいわけです。事実として教えればいいわけですね。中国へよく行くので、日本人で中国へ行っている連中がいる。その中で友人の一人は、子どもを中国人の学校へ通わせています。先生からあるとき、友人のところへ電話がかかってきた。「あした、何々ちゃんは学校を休ませてください」「どうしてですか?」「あした、南京虐殺の話をするので、ちょっとやっぱり日本人なら嫌でしょう」とか言われた。「いや、構いませんよ。子どもにはそういう教育をやっぱり受けさせたいと思う」

次の日、子どもは泣いて帰ってきました。ぶん殴られて、蹴っ飛ばされて、傷も負って。しかし、2日か3日したら、またみんなと遊んでいる。彼は、それでいいんだと言うのです。殴られて、蹴っ飛ばされて、泣いて帰ってくる。それでいいんだ。そして2~3日でまたこうやって遊んでいる。それでいいと

言うんですね。

彼のそういう教育方針にすごく納得します。そのときに教師が「あした南京虐殺を教えるから来ないほうがいいよ」と言って、「いや、行きます。行かせます」と言って、彼は想定したそうです。殴られ、蹴られ、傷を負って帰ってくるだろうなど。そのとおりだったと。しかし、2~3日したら、またみんなとわあわあやって遊んでいる。

結局はそういう記憶は大事だから、やはり教育の一環として自分が子どもにやらせたことを誇りに思っていると言っていました。

私たちは、逃げることはできない現実がある以上、それに対して、それに伴う行為、反作用に対しては受けなければいけないと思います。

質問 世界の歴史をみると、力が正義であることは否定できません。それから文明が文化を破壊しているという事実もみている気がします。国の持っている文化を大切にしないと、その社会はめちゃくちゃになってしまう。日本のいまの状態は、文明に破壊されて、商店街は潰れ、大きな企業が勝手なことをし、近所近辺がなくなっていった。これが一番恐ろしいことだと思う。日本の文化を守るために、何かいい知恵や対応があれば教えていただきたいと思います。

歴史教育の相互交流を

保阪 国際間でどういような了解事項をつくっていくのか。それが教育の中でどういような了解点をつくっていくかということだと思います。

私は2~3カ月、アメリカのテネシー州のナッシュビルというところにいたのです。ここはバリバリの南部のところ。そこにヴァンダービルト大学というのがあります。鉄道王のつくった大学。そこに来ている日本人の学生とアメリカ人の学生のクラスに行って話したことがありました。それは日本の近代日本史というものに興味がある連中が

集まっているところでした。

アメリカ人が日本の歴史を知ったときに最初に言う質問はなるほどなあと思いました。いまから15年ぐらい前のことです。彼らは、「日本はどのようにしてアメリカと戦争をしたのか。その最大の理由は何なのか」。私が「それはあなたたちの国の教科書には何と書いてあるのだ」と言ったら、「われわれが習ったのは、日本はドイツと手を結んで、そして世界制覇をもくろんで、わがアメリカ、イギリスなどに戦争を仕掛けてきた」と。言ってみれば一番月並みなのですけれども。

けれども、この月並みな中に、彼らが、それだけではないだろうというところを考えると、日本に興味を持つ。例えば新渡戸稲造や誰かの本を読んだ。日本人が、私が教えられた教科書とは違うんじゃないかと思うんだけど、どうかということの説明しろと彼らは言う。

私は、それはあなたが言ったのは、政治的システムの中で私たちの国の選択の誤りがあったのは事実だから、それについて私たちはかなりいろいろ日本でも議論しているところだ。けれども、もっと言えば、私たちの国は、もともと——伝統と歴史に入りますが——私たちの国はそんなに野卑な国ではないということの説明しました。

説明したから彼はわかっていると言っていた。わかっているということ私たちが説得するためには、私たちの側の大きな過ちもきちんと伝えないと、それは理解されないのではないのでしょうか。一方的に私たちの国のことを言うのではなくて、お互いに、こっち側にもおかしい時代はあった、あなたの時代にもあったろう。それを越えていまいがあるところで、了解点は何なんだろうか、ということ。です。

そういうような交流というのは、教育の中よりも、むしろ日常の中に本当にあるのだなと。その意味で言うと、私たちの国が日常をもっと交流を深め、大切にするとというのが大事なのだというような感じがするしかな

いようがない。そういう感じがします。

質問 保阪さんは朝日新聞の第三者委員会のメンバーになりましたね。慰安婦問題がいま非常に問題になっていきます。保阪さんはどういう立場で、第三者委員会で発言するのでしょうか。

保阪 第三者委員会でどんな発言をするか、まだ議題がどんなのか知らないので、ここでは言えません。ただ、私は慰安婦問題に、いまのレベルの段階での発言に、そのまま加わる気はないですね。もっと根源的なところから考える必要があるというのが持論です。それを発言して、それが受け入れられないで、「そんなまどろっこしいことを言っているなら保阪さんあれだよ」と言われたら、やめる以外ないですね。それはどういうふうになるか、いまはわかりません。会合をまだ開いていませんし、どういうふうになるかわからないとしか、言いようがないですね。

質問 お伺いしたいのは、いまの内閣ですね。非常にポピュリズムなところもあるけれども、本音は岸信介氏にならった、ああいう国家にしようという底意があるのではないかと。勝手にそういうふういろいろな情報から思うのですけれども。そういう意味で非常に重大な時期に日本は差しかかっていると思うのです。ご所見をお伺いしたいと思います。

保阪 来年は東洋経済が 120 周年なんですね。前から石橋湛山に興味を持っていました。石橋湛山は 31 年に 70 日ほどで首相を引退してしまいます。石橋湛山の跡を継いだのは岸です。私が興味を持つのは、石橋湛山が施政演説するとき、体を壊して寝ていたのです。で、副総理の岸が石橋の施政演説の代読を国会でしました。それは、どうみても岸信介という人との間ではそごを来す内容です。石橋は、言葉は変ですが、官僚支配を嫌い、自由

主義的な経済の活性化を言っている。それは岸といろいろなところで違うと思います。

いつも思うのですが、そのとき岸がどういうつもりで石橋の施政演説を読んだのだろうと。間もなく彼が本当の首相になります。彼の演説は、石橋とはまた、踏襲するという言葉は使います。実はちょっと違ってはいませんね。

行政主導内閣の問題点

いまの首相がどういう国家目標を持ち、どういう国家体制をつくらうとしているのかということについて、どちらかと言えば批判的な側にいます。最大の懸念だけを言っておけば、行政主導型内閣でしょうか。

実は昭和 16 年 12 月 8 日の太平洋戦争に至るまでの間の戦争を決定し、遂行していくプロセスの中では、東条内閣の——これは軍人でしたから——軍事主導體制、これはとりもなおさず行政主導内閣でした。立法府は、あるいは司法は、ほとんど行政に抑えられるという状態でした。

行政主導内閣が三権分立のバランスを壊して特化していくときに、それは明らかに、ある意味で言えば国の政治が崩壊していくのだとみます。

ですので、いまの内閣に対する懸念は、行政主導内閣というのを、できればやめてほしい。やめるというのは変だけれども、立法がしっかりしてほしい。立法がしっかりして、そういうような問題点のところをきちっと明らかにしてほしいと思います。

質問 戦後 70 年に触れられたところで、特攻作戦とか玉砕について述べられたところ。どの国にもこういう作戦はなかった。日本の風土にもそういうものはなかったはずなのではないかと、おっしゃったように思います。ある意味、捕虜になって辱めを受けずに武士道の中での精神の中では、切腹みたいなものを尊ぶような精神というか、ちょっと日本人の中には複雑な感情というものがあって、

戦争から、敗戦からを振り返ってみても、「鬼畜米英、撃ちてしやまん」から、敗戦になったら「ギブ・ミー・チョコレート」になった。天皇を賛美していた国が、マッカーサー神社までつくろうかと、今度はマッカーサーのほうになびいていく。ある意味、日本人の持つ複雑な感情というのか、ダブルスタンダードみたいな顔を持っている。その辺が、外国からみると非常に不思議に思われる、日本の不可思議さかもしれません。

これはドナルド・キーンさんや、あるいは亡くなったロサンゼルスタイムズのサム・ジェームソンなども言っていたことです。やはりアメリカの兵隊は捕虜になっても決して自殺するとかそういうことは考えたことがないと。日本人の捕虜はそういうことを考える人もいるけれども、そうでなく話してくれる人もいます。だからそういうことからして、単純に考えることはできないだろうと。

そういう中での日本の戦後 70 年たつての欠落しているものがあるとすれば、東京裁判史観はありますけれども、日本人自身の手による日本人の太平洋戦争史観なのではないでしょうか。果たしてどういう戦争責任があって、誰がそれを担うべきか。日本人自身による最終的な判断が出ていないことに大きな問題があると思います。そういうことにまだ日本人自身がけじめをつけていないところにも大きな問題があるのではないかと。

そういうことに対してはどのようにお考えであるか。つまり、日本人の持っている複雑性みたいなものから戦後 70 年を読み解いていかなければ、なかなか外国からも本当には理解されないものがあるのではないかと思います。いかにお考えでしょうか。

保阪 戦争責任について思いますけれども、いろいろな考えがある中で、昭和 20 年 10 月、幣原内閣のときに次田大三郎という書記官長、岩田宙造という司法大臣、吉田茂という外務大臣が画策したのでしょうか。東京裁判をやる前に、この内閣で、日本側で裁判をやる

うと。そして 13 条の勅令案をつくって天皇のところへ持っていきます。それは、天皇の意思に反して次の戦争を起こした、満州事変から起こした軍の責任者、あるいは政治の責任者を問うというような裁判であると。そして、その裁判は、第 1 条においては天皇の意思に反して、そして満州事変からの戦争を起こした軍人とか政治家、官僚、そういった人々を裁くということ。第 2 条では、そういう裁いた人に死刑ないし無期、禁固、ないし定期的な有期刑を与えるということなのですね。

それを天皇のところへ持っていきます。天皇は、きのうまで私の臣下であると言っていた者を、きょう裁くわけにはいかないと言って、それを認めません。で、この勅令案は戦争犯罪者に関する何とかの勅令と言うのですが、歴史の闇に埋もれてしまいます。吉田も、次田大三郎も、岩田宙造も、それを焼却したのでしょうか。残っていない。

ところが、牧野伸顕の日記の中だけには挟まれていた、1 枚。それが明らかになって、戦後、その史料をもとに研究が続きました。それは、吉田茂が牧野のところへ相談に行ったということをあらわしているわけですが、

「戦争の責任」と「戦争責任」の違い

問題は、その勅令案の第 1 条にあるのが、どちらかと言えば戦争主導に距離を置いた官僚、距離を置いた政治家などが、こういう責任があるのだということを書いているということがわかります。それは、天皇の意思に反して、そして満州事変から謀略とか戦争を始めた、この軍人、官僚、政治家を裁くということですね。

問題は、その「戦争責任」という言葉は、アメリカの東京裁判でも明確に永久戦犯の決定のときなんかには、天皇は初めから該当しないとして外しました。戦争責任というのはどういうことなのかと、もう一回根本から考えるべきだというふうに思っています。

「戦争の責任」なのか、「戦争責任」なのか。戦争の責任というのと戦争責任は全然違うわけです。「戦争の責任」という言葉だといいいと思いますね。開戦責任、継戦責任、終戦責任。あるいは戦争で国民に過重な負担をかけた責任。主導者が問われるべき——国民がいろいろなふうに戦死したわけですから。そういったいろいろな形の責任があると思います。それを総称して「戦争責任」という言葉は成り立たないと思っているのですが。

今度の『実録』で注目すべきところは、戦争の責任についてどういうふうにかかれていたかということですね。これについて、全く戦争の責任というふうには書かれていません。戦争の責任について昭和 21 年 5 月 4 日に、天皇は松平慶民という宮内大臣を呼んで、その記事を指さした。それは東大の南原総長が「天長節に際して」と講演したことが新聞に出ていたのです。その記事を読みながら、天皇に戦争の責任があることは当然であると。しかし、法的、政治的にはないと。憲法上そういうシステムになっている。ただ、道義的、人道的にはある。陛下にはこのことをずっと思って今後天皇であってほしいというようなことを言ったのです。そういう記事がそのまま引用されている。

天皇はその記事について松平と懇談したと書いています。つまり、そこしかないのです。天皇は、その言葉をみずからの戦争の責任の根底に置いていると思います。それは前から考えていたので、そうだというふうに思います。

私たちは、戦争責任という言葉を使うときに、どういった言葉で、どういうふうな範囲で限定して話をするのか。「いやいや、とにかく戦争責任だよ」と言ってしまった瞬間に、問題は拡散し、実態がみえなくなるというような愚を犯すのではないか。これは私の考えなのですが。

戦争責任は、同時代の人たちの、それぞれの形の集積の中に、小さな責任から大きな責任までの集積の中に国家としての責任があるわけです。そのことを考えていったときに、

責任をどういうふうに理解するか。答えが出ていないけれども、差し当たりはそういうふうに思っています。

質問 昭和には占領という時代があったという。その中に、なぜ真の民主主義は確立しなかったのかとご指摘されている。一言でその点について、説明していただければと思います。関連するのですけれども、ニューヨークタイムスが『天皇実録』についてちゃんとした記事を書いていました。先生のお名前も出ています。何かご感想がございませうか。

日本の戦後民主主義はアメリカンデモクラシー

保阪 昭和 20 年 8 月に戦争が終わったときに、さあこれからは民主主義だということで、紙がない時代に、民主主義に関する本が何冊か、ざら紙の中で出てきます。その中に室伏孝信という人が書いた『新民主主義』というのがある。室伏さんというのは戦争中からの評論家でもあります。

それから野坂参三が『民主主義宣言』というのを出している。これは延安で日本人捕虜に向けて講演した内容です。

それから馬場恒吾も書いていますね。民主主義というよりも、『平和と自由への驀進』というタイトルですけれども、書いています。こういった本を読むと、民主主義というのは何だったんだろうということ自体の中に、私たちは民主主義そのものを実践する国家的な基盤は持っているのだ。あるいはそういうメンタリティーは持っているのだ。それが軍人によってこういうふうな凌辱された形になったのだということだと思います。

そういう本を読みながら、私の実体験を含めながら言えば、昭和中期の民主主義は、アメリカンデモクラシーです。アメリカのデモクラシーです。戦後民主主義というのは、アメリカンデモクラシーです。アメリカのデモクラシーというのは、基本的にイギリスやヨーロッパのとはちょっと違うと思います。デモクラシーの発祥とは違うと思います。

いろいろな違いがありますが、あえて1つ言えば、デューイのプラグマティズム。私たちの民主主義は、デューイのプラグマティックな民主主義だと思います。私たちにとって民主主義というのは、これほどプラグマティックなものだということ、だから私たちは受け入れたのだと思います。

しかし、民主主義というのはもっと考え、もっとじっくり心の中でそしゃくし、そして民主主義というシステムというものと理論というものを私たちに出してくるべきだと思うのです。

室伏孝信さんも、馬場恒吾さんも知的インテリ層です。野坂参三は共産党のいう民主主義です。そういった民主主義を読むと、アメリカ的なプラグマティックな民主主義的なもの、私たちの国民性はかなり合致しているのだなと思います。私たちの国の民主主義というのは、やはりアメリカンデモクラシーであって、このアメリカンデモクラシーをどこかで、ジャパニーズデモクラシーというとならば問題になる。けれども、そういう意味ではなくて、普遍的な民主主義に持つていくということはどういうようなことなのか。プラグマティックなアメリカ的民主主義というのは、憲法がそうですね。憲法9条はまさにそうだと思います。民主主義ということであれば、もしアメリカではない国の民主主義では、つくらないと思います。それは、日

本を二度と復讐させないぞ、武器持たせないぞ、というアメリカ的プラグマティズムの中の憲法ですね。

そういうふうに思うので、真の民主主義というのは、アメリカンデモクラシーをどういうふう克服していくか。それは私たちの能力ではいまのところは無理だという答えがはっきりと出ているのです。100年先の私たちの子孫に笑われるかもしれない。しかし、これはアメリカンデモクラシーなのだということだけは主張しておく。とにかくやはり、もっと違うデモクラシーというのをつくらなければいけないと心すべきではないかと思えます。

それから『天皇実録』は外国メディアも2~3、取材に来ています。正直言って、やはり外国メディアは、この意味はあまりわからないと思います。私たちとは理解が違うわけですから。要するにイギリスのメディアなどの視点は、王室とどう違うのだと。王室は、一人ずつ死んだからといってこんな立派なものを出さないよとか、いろいろ言っていました。

しかし、日本の天皇が、アメリカンデモクラシーの中で天皇像が変わっていくという意味で言えば、アメリカのメディアは、ある意味では充足感を覚えるのだらうなという感じはします。そういうような印象を受けています。

(文責・編集部)